映画「羅生門」批評文

本映画は、ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞とアカデミー賞名誉賞を受賞した日本の映画史において無視することのできない作品だと言われています。一九五〇年公開ということですが、私が見たのは、デジタル処理されたもので、映像がとてもきれいに仕上がっていて、驚きました。

映画の技術のことはよく分かりませんが、カメラワークや編集が現代の映画と比較しても決して劣っているようには思えません。光と影の強いコントラストによるモノクロの映像は美しく、また非常に力強いと思いました。黒沢明監督の作品に影響を受けた映画監督が世界中に大勢いるという話を聞いたことがありますが、当時の黒澤氏がどれだけ「先を行っていた」のかが分かるような気がしました。

物語は、芥川龍之介の「藪の中」が原作となっており、一つの事件について、現場で起きたできごとを、当事者それぞれの目線で語らせることで、保身のために嘘をついたり、自分の都合のいいように話を盛って話すのが人間であり、こうしたエゴは人間誰しもがもっているものだ、ということが強烈に伝わってきます。

設定は日本の平安時代ですが、誰もが理解できる普遍的なテーマを掲げていることが世界中で評価されている要因であろうと改めて感じました。芥川の原作の力は認めざるを得ませんが、映画化することで、一見複雑な事件の様相が、あたかも見てきたことのようにダイレクトに伝わってくる。お伽話かなにかを聞いているような、それでいて人間の深層心理を突いてくる。見ている自分に「刺さる」感じは、シンプルに凄いと感じました。

雨宿りをしている羅生門で、事件の参考人として出頭した検非違使からの帰途にあった杣（そま）売りと旅法師から話を聞くという設定の下人がいて、捨てられていた赤ん坊から着物を剥ぎ取り、手前勝手でない人間は生きていけないと言って去って行くのですが、彼の「本当のことを言えないのが人間だ」という台詞が印象に残っています。